

なががわりえこさく
 かきもとこうぞうえ

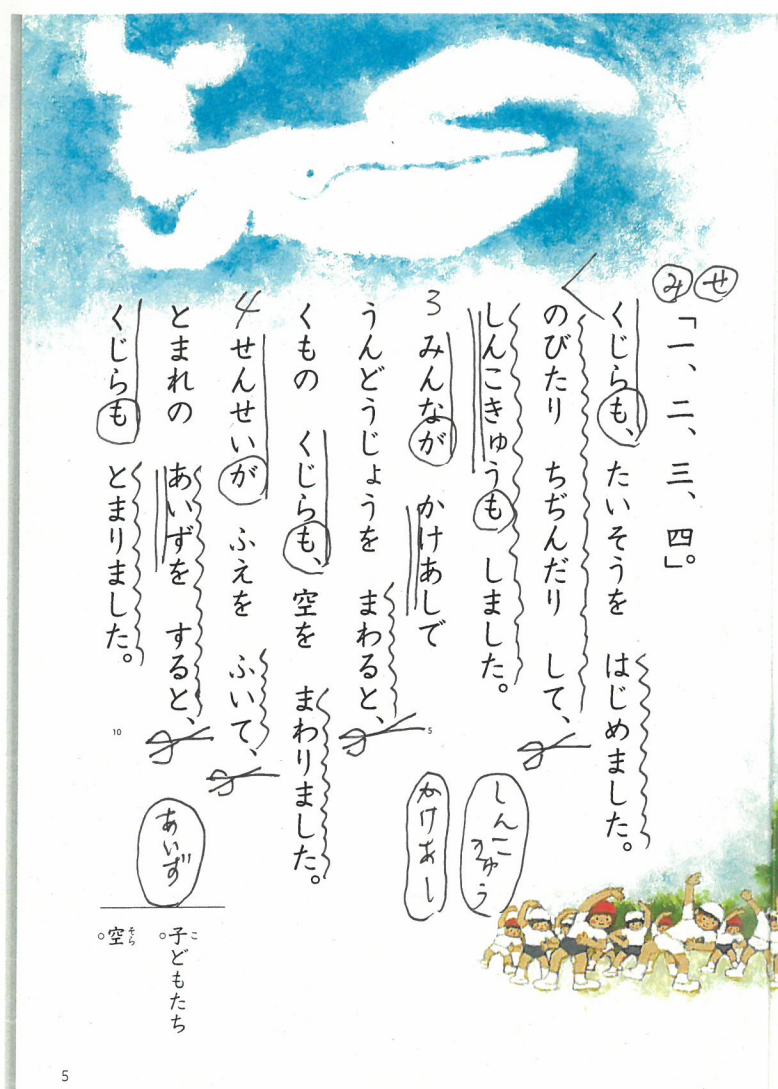
くじらぐも

四じかんめの ことです。 ゆく

一ねん二くみの 子どもたちが おこり
 だいそうを して いると 空に、
 大きな くじらが あらわれました。
 まっしろい くもの くじらです。



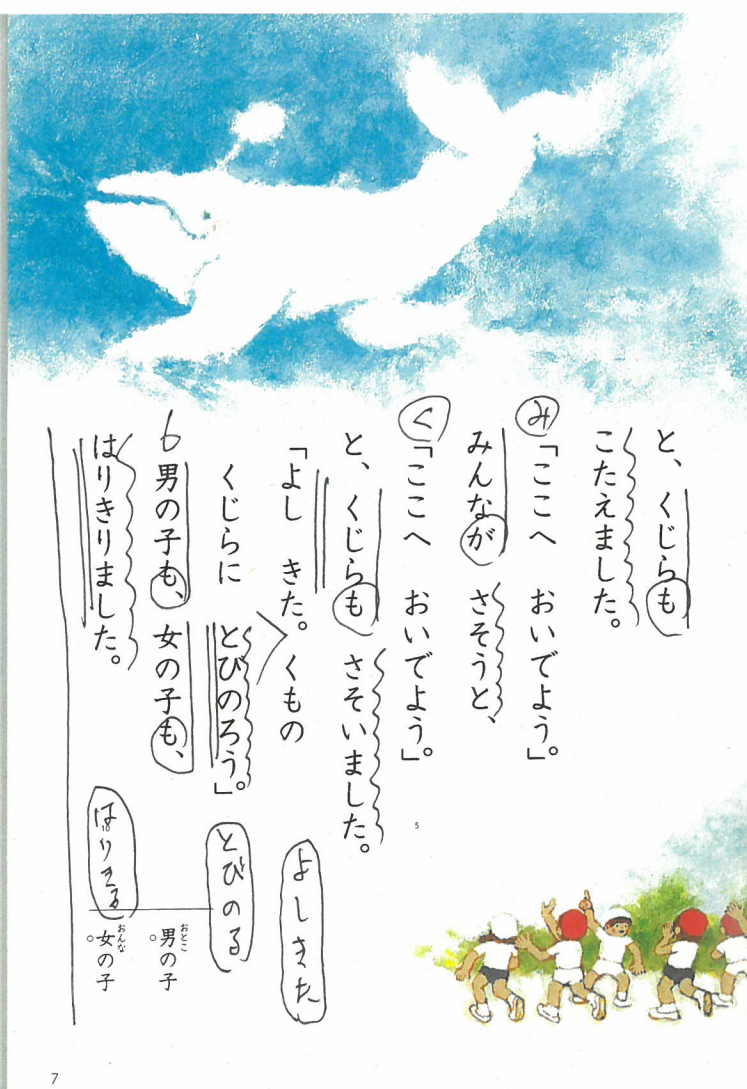
「一、二、三、四。」
 くじらも、たいそうを はじめました。
 のびたり ちぢんだり して、
 しんこきゅうも しました。
 みんなが かけあして
 うんどうじょうを まわると、
 くもの くじらも、空を まわりました。
 せんせい が ふえを ふいて、
 とまれの あいずを すると、
 くじらも とまりました。
 あいず 子どもたち
 空



「まわれ、みぎ。」
 せんせい が ごうれいを
 かけると、くじらも 空で
 まわれみぎを しました。
 「あの くじらは、きっと
 がっこうが すきなんだね。」
 みんなは 大きな こえて、
 「おうい。」
 と よびました。
 「おうい。」

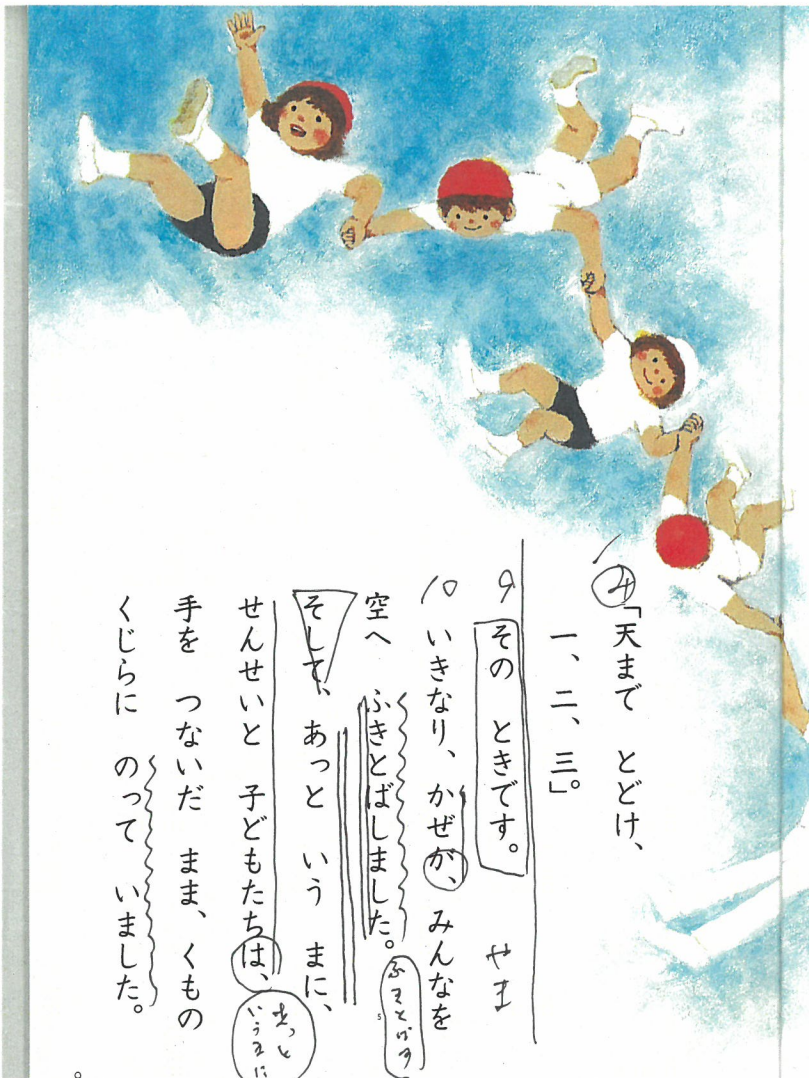


と、くじらも
 こたえました。
 「ここへ おいでよう。」
 みんなが さそうと、
 「ここへ おいでよう。」
 と、くじらも さそいました。
 「よし きた。くもの
 くじらに とびのろう。」
 男の子も、女の子も、
 はりきりました。
 よしきた
 とびのる
 男の子
 女の子



「みんなは、手を つないで、まるい わに になると
 天まで とどけ、一、二、三。」
 と ジャンプしました。でも とんだのは やっと
 三十センチぐらいです。
 「もっと たかく。もっと たかく。」
 と、くじらが おうえんしました。
 「天まで とどけ、一、二、三。」
 今度は、五十センチぐらい とべました。
 「もっと たかく。もっと たかく。」
 と、くじらが おうえんしました。

「天まで とどけ、
 一、二、三。」
 その ときです。
 いきなり、なぜか、みんなを
 空へ ふきとばしました。
 そうで、あつという まに、
 せんせいと 子どもたちは、
 手を つないだ まま、くもの
 くじらに のって いました。



「さあ、およぐぞ。」
 くじらは、青い 青い
 空の なかを、
 げんき いっぱい
 すすんで いきました。
 うみの ほうへ
 ぶらの ほうへ
 まちの ほうへ

「みんなは、うたを
 うたいました。
 空は、どこまでも
 どこまでも
 つづきます。」



おあづめ

せ「おや、もう おひるだ。」
せんせい「うでどけいを
みて、おどろくと。」

く「では、かえろう。」

と、くじらは、まわれみぎを
しました。

く「しばらく、いくと、がっこうの
やねが、みえて、きました。」

くじらぐもは、ジャングルジムの
うえに、みんなを おろしました。

ジャングルジム



み「さようなら。」

みんなが 手を ふった

とき 四じかんめの

おわりの チャイムが

なりだしました。

く「さようなら。」

くもの くじらは、また、

げんき よく、

青い 空の なかへ

かえって いきました。

チャイム



おもいうかべながら よもう

く「くじらぐも」を、こえに だして よみましょう。

「いいな」「すきだな」と おもった ところは どこですか。

かぎ「「」の ところは、どのように よみますか。

子どもと くじらぐもの ようすを おもいうかべましょう。

もつと たかく。
もつと たかく。

天まで とどけ、
一、二、三。



く「一ねん二くみの みんなは、くもの うえで、
どんな ことな はなしたでしょう。」

うわあ、まちが
小さく みえる。



おはなしに でて くる

ひとが、した ことや

いった ことを

おもいうかべながら、
よみましょう。

プラタナスの木

2021. 11.16
喜屋武政晴 (シマス)

二 マーちゃんと仲間たち (説明部)

マーちゃんといつも遊んでいる仲間は、せいの高い花島君とハイソックスが好きなクニスケ。それに、アラマちゃんだ。本当は荒井さんというのだけれど、口ぐせが「あらま」。だから、いつのまにか、そうよばれるようになった。四年生になって、クラスは別々になったけれど、それまではずっと同じクラスで、家も近かったからいまだに仲よしだ。

2 マーちゃんたちが集まる場所は川をいり公園で、バスケットコートぐらいの広さしかない。公園は、何も植えられていない花だんてこまわって古



推名 誠作
中島 梨絵 絵

大きなプラタナスの木が一本だけ生えているので、プラタナス公園とよばれている。中学生や幼児連れの母親などはめったに來ないから、マーちゃんたちは、自分たちの遊びができた。水飲み場があるのも助かるけれど、何よりうれしいのは、この公園では、時間によってボール遊びができることだった。他の公園では、ボール遊びは禁止なのだ。

3 最近熱中しているのは、サッカー。リーダーはクニスケだ。クニスケは、サッカーをするときには、ハイソックスの中にすね当てを入れる。本格的なのだ。二人がゴールキーパーと守りになり、二人がドリブルやパスをしてせめる。花だんと花だんの間に二メートルぐらいの空間があつて、そこがゴールだ。

三 プラタナスの木とおじいさん (はじまり)

つゆ明けのころからだろうか、プラタナスの木の下にある、古い小さなベンチにおじいさんがやって来て、にこにこしながら、マーちゃんたちのサッカーをながめているようになった。

5 試合が白熱してくると、ときどきパスやドリブルのコースが外れて、プラタナ

・白熱

・禁止

スの木の下にボールが転がっていくことがある。そういうとき、おじいさんは、こしをかがめてボールを大切そうにつかみ、そのままじっとしている。

「こうしてないと、どっちかが有利になってしまうかもしれないからね。」

おじいさんは、そう言って笑う。

6 そのうちに、マーちゃんたちとおじいさんはだんだん親しくなり、サッカーに誘われると、みんなプラタナスの木の下に集まって、おじいさんと話をするようになった。おじいさんが「みんな水をもっとたくさん飲んで、少し日かげに入つて休まないで熱中症になるよ。」と言ったのがきっかけだった。太陽の光が夏に向かつてずんずん強くなり、大きな葉のプラタナスの木の下が、とてもよい日かげになるのだ。

7 おじいさんの話はいつもおもしろかった。

8 ある日、おじいさんは不思議なことを言った。

「このプラタナスの木が、さか立ちしているところを考えたことがあるかい。」

「あらま。木がさか立ち。」

・笑う 有利

9 アラマちゃんが、いつものようにおどろいた。

「そう。この木がさか立ちするだろう。すると、木のみきや枝葉と同じぐらいの大きさの根が出てくるんだ。」

木というのは、上に生えている枝や葉をささえるために、土の中でそれと同じぐらい大きな根が広がって、水分や養分を送っているんだ。

「どの木もみんなそうなんですか。」

今度は、花島君がマーちゃんの頭ごしにきた。

「たいていの木は、大きな根が地面の下にぎっしり広がっているのさ。だから、このプラタナスの木が公園全体を守っている、といつてもいいくらいだ。もし、地上のみきや枝葉がなくなつたら、根は水分や養分を送れなくてこまってしまうんだ。」

10 マーちゃんと花島君とクニスケは「ふうん。」と同じ



ような声を出したが、アラマちゃんはやっぱり「あらま。」と言った。

それにしても、木の根がこまってしまうなんて、初めて聞く話だ。おじいさんの話を聞いてみると、おじいさんは、公園のできるずっと前からプラタナスのことを知っているみたいだ。

三 夏休み (おこり)

夏休みに入るとすぐ、花島君とクニスケはお母さんのふるさとに帰省し、アラマちゃんは、家族と海外旅行に出かけてしまった。一人残ったマーちゃんがプラタナス公園に行くと、いつものようにおじいさんがやって来て、ベンチにすわった。マーちゃんは「自分ももうすぐお父さんのふるさとに行くので、夏休みが終わったら、またみんなで来るから。」と言った。

「お父さんのふるさとには、木がいっぱいあるだろう。みんなによろしく。」

13 おじいさんは、にっこり笑った。

14 夏休みも半ばというころ、マーちゃんは、祖父の家にいた。家の周りには森が広がっている。森にはいろいろな木や草が生え、鳥やせみの声が満ちていた。森と

・半ば
・祖父
・父
・母

・帰省
・残る

森の間には小川が流れ、小さな魚が、ときどき白いはらを見せてきらりと光った。マーちゃんは、この森の中で毎日走り回って遊んだ。

15 マーちゃんが祖父の家に來て一週間ほどたったある日、大きな台風が森をおそった。森はおこったようにゆれ、小川は濁流となつてあばれた。鳥やせみも、どこかにすがたを消した。テレビは、今年いちばんの強い台風だと伝えている。早々とふとんに入ったマーちゃんは、ゴーゴー鳴りひびく台風の音を聞きながら、プラタナス公園のおじいさんの顔を思い浮かべた。最初ははつきりしていたおじいさんのえがおが、しだいにぼんやりとしていく。マーちゃんは、いつしか深いねむりに落ちていった。

16 一夜明けると、台風は通りすぎていた。青く晴れ上がった空の下で、あんなにゆれていた森は、今は静かに太陽の光を受けてびかびかがやいている。小川はまだ濁流のままだったけれど、鳥やせみはうれしそうに鳴き始めている。マーちゃんは、おじいさんの言葉を思い出した。森の一本一本の木の下には、それと同じぐらい大きな根が広がっている。マーちゃんには、なぜか今、それがはつきりと

・今年

・台風



見えるような気がする。だから、強い風がふいても木はかんたんにはたおれたりしないし、森もくずれたりしないのだ。一本一本の木とその根が、ずっと昔から

四 残った根 (こまわっている) (つづき)

森全体を守り、祖父の家だつて守ってきたのだ。

17 長い夏休みが終わる、新学期が始まった。

18 プラタナス公園の異変を最初に知らせてくれたのは、ハイソックスをずり落とした。放課後、四人はプラタナス公園に走った。

19 本当だった。マーちゃんが、お父さんのふるさとで台風にあつていたころ、当然だけれど、この公園も台風におそわれていたのだ。近所の人に聞くと、プラタナスがたおれかかってきけんだつたのだという。マーちゃんたちがいない間に、大きなプラタナスは切りかぶだけを残して消えてしまつてた。その横には、強い日

・放課後
・当然
・浴びる

を浴びて、ベンチがぼつんと置かれていた。

20 公園は、立ち入り禁止になっていた。

「根は、ほられてはいないみたいだ。でも残った根はきつとこまわっているんだろね。」

花島君が、かたを落として言った。アラマちゃんは、いつもの口ぐせを言わずにだまっている。

五

ぼくをさびやカマヤ板木の根がかりだ！(ヤマ)
立ち入り禁止がとけて、また、マーちゃんたちは、公園に遊びに行くようになった。木が切られてから、おじいさんは公園にすがたを見せなくなっていた。サツカーも前ほど白熱しなくなり、マーちゃんたちは、おじいさんがいつもすわっていた、日かげのなくなったベンチにだまってすわりこんだ。だまっているけれど、みんなが何を考えているかは分かる。

そんなある日、ベンチにすわっていたマーちゃんは、思いついたように、プラタナスの切りかぶの上に立ってみた。今でも地下に広がっている根のことを想像していたら、そうしたい気持ちになったのだ。

23 花島君が不思議そうに見ていたので、

「おいでよ。なんだか、根にささえられているみたいだよ。」
と言うと、花島君だけではなく、クニスケもアラマちゃんも切りかぶに乗ってきた。

24 せいの高い花島君を真ん中にして、両手を広げてプラタナスの切りかぶに乗っていると、みんなが木のみきや枝になったみたいだ。

25 プラタナスは切りかぶだけになったけれど、ぼくたちのプラタナス公園は変わらない。春になれば、プラタナスも芽を出すだろう。そうすれば、きつとまた、おじいさんにも会える。それまでは、ぼくたちがみきや枝や葉っぱの代わりだ。そう思いながら、マーちゃんは大きく息をすって、青い空を見上げた。



推名誠
一九四四年、東京生まれ。作家、映画家、脚本家。『怪物』『大きな約束』などの作品がある。

○カマヤ 板木がなくなると、根はこぼれているだろうな。

おじいさん

学習



見通しをもとう

登場人物の変化を中心に読み、物語をしようかいしよう

- 登場人物の気持ちや想像できる言葉に着目しよう。
- 登場人物の変化とそのきっかけについて、考えながら読みましょう。

とらえよう
●「プラタナスの木」は、一行空きて五つの場面に分かれていきます。言葉や表現に気をつけながら読み、それぞれの場面の様子や出来事をたしかめましょう。

●物語の最初と最後で、「マーちゃん」はどう変わりましたか。それは、どの言葉や表現から分かりますか。

●「マーちゃん」が変わるきっかけとなった出来事は、何だと思いますか。それがきっかけだと考える理由とともに、友達と話ししましょう。

●最後の場面で、「マーちゃん」は、どんなことを感じていたと思いますか。想像して、友達と話ししましょう。

●「マーちゃん」たちは、また、「おじいさん」に会えると思いますか。理由とともに話ししましょう。

●「プラタナスの木」という物語のみりよくは、何だだと思いますか。ノートにまとめましょう。

ひろげよう
●登場人物の変化を中心に、「プラタナスの木」のみりよくをしようかいする文章を書きましょう。友達と読み合って、「いいな。」と思ったところや、まねしてみたいところを見つけてみましょう。



ふりかえろう

- 登場人物の気持ちや表現に表れていましたか。
- 「マーちゃん」の気持ちや考え方は、何をきっかけに、どう変わりましたか。
- 物語のみりよくをしようかいするときには、どんなことに気をつけたいですか。

1 ノートの例

場面 様子や出来事
●最近、マーちゃんたちは、プラタナス公園でサッカーに熱中している。

2 考えを伝え合うときの言い方の例
「マーちゃん」は、「おじいさん」がすわっていたベンチにすわりこんでいたとき、——と考えていたんじゃないかな。だから、プラタナスの切りかぶの上に立ったときには、——と感じたと思うよ。

3 しようかいする文章の例

「プラタナスの木」という物語には、「マーちゃん」という人物が出てきます。最初は、——だった「マーちゃん」は、——や——という出来事を通して、——
最後まで読むと、——な気持ちになります。ぜひ読んでみてください。



学習

登場人物の変化と、出来事の間をどうとらえる

●場面のうつり変わりに気をつけて読み、登場人物の気持ちや考え方が表れている部分を見つける。

●それらを結びつけた関係づけたりして、どう変化したのかを想像する。人物の変化に、どんな出来事がどのように関わっているのかを考える。

平いかそう

自分と同じくらいの年の人物が出てくる物語を読むときには、人物の変化を、自分と照らし合わせながら読みましょう。

この本、読もう

みなさんと同じくらいの年の人物が出てくる物語です。どれを読んでみたいですか。



雨やどりはすべり台の下で、みんなの不思議な思ひ出話の中に、必ず出てくる人——雨屋さんは、もしがたにまはさず使いたくありません。



雨ふる本屋
ルウ子が入った雨ふる本屋には、わすれた物語の種が、「ゆめの力」で本になるのを待っています。



百まいのドレス
いつも同じ服を着ているワンドは、家には百まいのドレスがあると聞いて、さすがに驚いてくれません。

利

笑

省

残

周

課

然

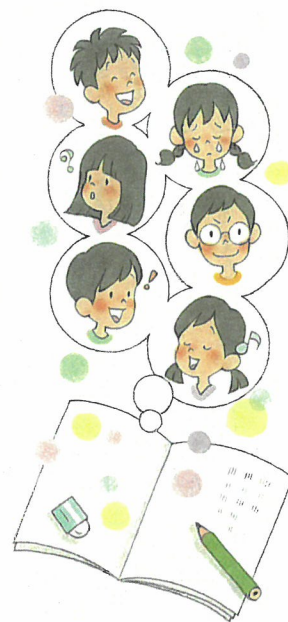
浴

芽

158ページ

心の動きを言葉にして、詩を書こう
感動を言葉に

毎日の生活の中での出会いや発見、感動を、詩にしてみよう。詩は、短い文で、そのときの思いを言葉にしたものです。短いからこそ、伝えたいことをよりすぐり、表現を工夫しましょう。



たしかめよう

「四年上までの学びをたしかめよう」6ページ

学習の進め方

1 詩に書きたいことを決める。

2 詩の組み立てを考える。

3 言葉を選んで、詩を書く。

4 友達の詩の工夫を見つける。

ふりかえろう